

現地通信

3枚の写真をみていただきたい。いずれも水をはった水田に水牛を追いかけて土と草を踏みこませ、稲植付けの地寄せをしている状況である。その方法とまわりの景観は互いに大変よく似ている。犁やまぐわを使わないこの地寄せ法は蹄耕または踏耕といわれ、その発生環境と分布からみて犁耕農耕とは対照的な技術である。写真の追い子たちは、ハーッ、エーッ、ホゥ、ホゥ、ホゥとかけ声を発して水牛に動作を指示し、むちで群をまとめながら、10頭ほどの水牛をぐるぐると反時計まわりに追う。かけ声と泥水のしぶきの作る旋律のリズムは緩急があり、やや急調子の追分風である。

3枚の写真を出したのはほかでもない。その地名をみていただきたいからである。1枚はルソン島ビコール地方の河谷低地、1枚は南スラウェシ山中の棚田、1枚はスリランカの湿潤地帯の谷地田である。互いに遠くへだたったこれらの地域で、きわめてよく似た、しかも蹄耕という特殊な方法が行われることは、無犁耕農耕圏が島嶼域に帯状に存在することを示している。東および東南アジア地域での蹄耕の分布をみると、その点は一層はっきりする。東からあげると、種子島、沖縄本島、宮古、波照間、西表、与那国の南西諸島、フィリピンではルソン島山岳州の棚田、ビコール地方の河谷低地、サマール、レイテ島の低地、インドネシアではチモール諸島、スラウェシ島の南スラウェシ、中部スラウェシ、スマトラ島の南スマトラ、西スマトラの各地、マレーシアではサラワクの4区、5区の海岸低地、東北部のクラン・クラビット高原、マレー半島のパハン、マラッカ、ペラの河谷低地などである。以上のように、その分布は島嶼域に集中する。その環境を勘案すると、蹄耕は湿潤熱帯島嶼域を特徴づける農耕技術である。それは大陸部の犁耕農耕と明確に対置される技術である。海上の道を通して日本にもそれはつながるものであることが判る。

湿潤熱帯島嶼域には蹄耕以外の無犁耕技術要素も

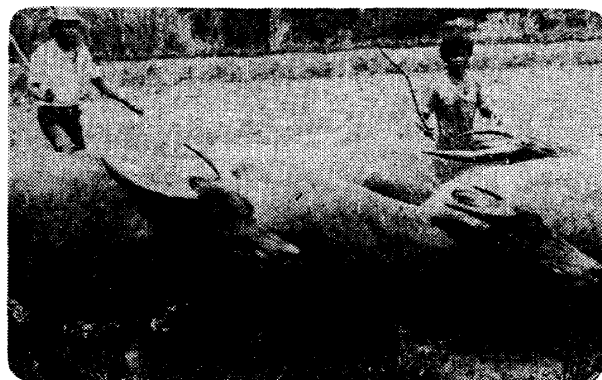
* Hisao Furukawa, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

スリランカは東南アジアである

古川久雄*



1. フィリピン、ルソン島ビコール地方ナガ市周辺



2. インドネシア、南スラウェシ州ルー県カナンデデ



3. スリランカ、カルタラ地区パラゴスタ

共通にみられる。それは例えば櫛型鋤といわれる棒状の掘具、パラシ、タジャックなどの耨刀による地拵えである。耨刀は焼畑に使われる道具そのものであるし、櫛型鋤も掘棒との関連が明らかだ。したがって、蹄耕、耨刀、櫛型鋤による地拵えは、湿潤熱帯島嶼域において焼畑陸稲が水田においてくる過程で生じた農耕技術であると考えている。

1982年9月にスリランカを初めて訪れたが、そこでこれらの農耕法が広く行われているのを見た時、実のところ跳び上がるほど驚いた。というのは、古くから犁耕の発達したインドと交渉が密で、すでに紀元前にインドの稲作が導入されたことが知られているスリランカで、蹄耕をみようとは想像もしなかったからである。と同時に、スリランカは湿潤熱帯島嶼域であり、その意味で東南アジアの一部であると強く印象づけられたことが、この小文を書くきっかけである。次に、1982年9月29日にスリランカ南岸のフンガマで見聞した、マハ作季の地拵えのようすを簡単に述べる。

9月下旬に北東モンスーンの雨が始まり、水田には次第に水がたまる。さらに上流のワラウェ・ダムからも水をもらう。十分湛水すると蹄耕を行う。水牛は3頭ないし4頭ずつ首のところでつないで横列の1単位とし、それにひとりずつ追い子がつく。4〜5単位の水牛群を水田に追いつこみ、1日で4反の田を踏みつけ、土の攪拌と草の踏みこみを行う。10日おいて2度目の蹄耕を行う。これで荒拵えは終わり、土と水と草はよくまぜられてドロドロの練り土になる。次に、田面の水を排水し、エブリと足の裏で田面を均平にする。エブリは荒ならしに使用し、均平の仕上げは足の裏で行う。エブリを立てて身体を支え、片足を左右に振って丁寧に均平化する。このあと、長柄の鍬で浅い排水溝を田面に縦横につける。これで地拵え作業は完了し、そこに芽出し粃を散播する。丁寧に均平と浅い排水溝は、田面の水深を一律にコントロールできるようにし、粃の苗立ちをよくするためである。このあと、除草は行わない。湛水深を変えて雑草をコントロールする。収穫は1月にカマで行う。すでに田面は乾いているので、田に脱穀場を作り、足で踏みかき、牛に踏ませる。

蹄耕で地拵えをし、水深コントロール用の浅い排水溝をきざみ、芽出し粃を散播するスリランカの稲作法は、東南アジア島嶼部でも古い栽培法を残している地帯の慣行と、驚くほどよく似ている。両者が共通の農耕圏に属していることは疑いない。次の問題は、この農耕法がインドのものか、マレーのものかである。インドは広く、それ自体種々の系列を含むが、南インドの景観の中心的イメージは、強い乾季があり、赤茶けた砂質の土がむき出しになってお

り、その中にアカシアが点在するものである。植生タイプは雨緑林ないし乾燥ステップである。この環境に見合った農具は犁である。強い日射しに焼かれた地表は堅い皮殻で覆われる。それを砕き、雨水を土中に浸透させるためには、尖頭の丸太を牽けばよい。現在でも最も一般的な雑穀栽培法は、犁、まぐわで土をかき、トゥジンビエ、シコクビエ、モロコシ、豆などを散播または条播し、犁をかけて覆土する方法である。南インドは、このような雑穀畑作圏である。かんがいのない水田地域では、稲も畑作物としての位置づけをとどめている。犁、まぐわで地拵えした畑状態の耕地に乾燥粃を散播し、発芽1カ月後に中耕用具でまびきと培土をする、いわゆる散播中耕稲が広くみられる。この耕地は畦のないものがあり、畦がある場合でも、田面は均平ではない。いわば潜在的には湛水の可能な畑地といえる。以上をまとめると、雨緑林・ステップ気候の南インドに入った稲は、畑作物として雑穀類と同様に栽培されたと考えられる。農耕法は犁耕、散播中耕が基本となる。

蹄耕はこのような農業生態環境とは全く相容れない技法である。熱帯降雨林は人工の手が入ると、イネ科草本、カヤツリグサ、シダなどの草原となるが、焼畑的な段階ではその厚い芝土を利用した点播稲栽培が耨刀と掘棒により行われる。連年作付けの段階では芝土は消滅するが、いつもはじめじめとした立地は蹄耕で容易に地拵えが可能である。湿潤熱帯降雨林に入った稲は、したがって耨刀、掘棒による焼畑陸稲から、蹄耕による水田化、そこでの湛水散播という径路をたどったと考えられる。

このような降雨林地帯は、日本の南西諸島から、東南アジア島嶼域、スリランカ、インド亜大陸マラバール海岸、さらにマダガスカル島につらなる。この地域は蹄耕で代表されるマレー型稲作圏を構成するものである。他方、大陸部東南アジア、インド亜大陸中央部、シンド平原、そしてさらに西へつらなる乾燥平原農耕圏は犁耕、散播中耕で代表される。

スリランカがマレー型稲作圏に属することはほぼまちがいない。そのことは、スリランカが古くからギリシア、エジプト、アラビアなどと交渉をもっていたことを考えると、マレー型稲作の西への伝播に重要な意味をもつ。マレー人のプラフ（舟）はどのような航路で、どれほど西へ達したものでしょう？彼らはイスラムやキリスト教のように輪郭の明瞭な代物を運んだわけではない。しかし、漁民、農民、行商人として彼らは東西を往還し、無名の思想と、熱帯降雨林の農耕技術を運んだにちがいない。マレー世界のグローバルな分布をあぶり出すのに、どんな目をわれわれはもてばよいのだろうか？（京都大学東南アジア研究センター助教授）